

# 自悠新聞

〒980-6101

仙台市青葉区中央1-3-1 アエル1階

発行所 丸善仙台出版サービスセンター

☎022-264-0151 fax022-264-0112

e.ishimori@nifty.com

編集長 石森浩一

平成21年(2009年)11月 No.80

印刷 東北堂印刷(株)

連載  
第2回

## 第16回東京国際ブックフェア専門セミナー

### 『出版産業の課題解決に向けて』

今夏開催された第16回東京国際ブックフェアの専門セミナー、『出版産業の課題解決に向けて』、これからの取引・流通・販売のあり方とは、『』について要旨を報告いたします。

パネリストは(株)筑摩書房代表取締役社長 菊池明郎氏以下(菊)と表記、丸善(株)代表取締役社長 小城武彦氏以下(小)と表記、日本出版販売(株)常務取締役 安西浩和氏以下(安)と表記、(株)トーハン常務取締役 近藤敏貴氏以下(近)と表記として(有)NET21取締役 副社長 田中淳一郎氏以下(田)と表記の5氏です。司会は(株)文化通信社取締役編集長 星野涉氏以下(星)と表記です。



東京国際ブックフェア

(星)現在の出版界は不況の波にのまれ厳しい状況ですが、書籍の流通に携わる者として、どんな取引条件言い換えればどんな書籍の流通の仕組みが良いと思われませんか。(安)書籍がいかにか儲かっているのか、統計的にも明らかです。雑誌は利益率がよいものの、売上が低迷しています。4兆兆の売上しかありません。つまり40%を越えるものが返品となっているのです。書店の経営が大変で、つぶれて行く書店が相次いでいます。急務は書店に利益が還元されるような仕組みにすることと考えています。仕入れ販売の掛け率を高め、返品掛け率を下げる、言い換えれば、よく売ったところは利益が上り、返品が多いところは損をするような仕組みにしたいのです。

(小)書店を経営してよく分かったが、書店員の皆さんは、とても一生懸命仕事をしています。しかし書店として儲けからな

い。これは今の流通にも問題がある。即ち、「売れなければ返品すればいい」という書籍流通の仕組みに甘えているところがある。今の流通では仕入れた本は大方が返品できる。この売れなければ返品というマーケティングの甘さが致命傷になりかねない。書店がお客様を理解して、つまりお客様が何を求めているかを理解して、その上でどんな本を売ったらよいかを自らが進んで考えることが今大事だと思う。早くこれに気が付かないと書店はなくなってしまう。書店は自ら力を付けていく必要があると思います。国の重要な産業である書店が無くなることは日本にとっても重要な問題です。徒歩でいける本屋を無くしてはいけません。

(菊)現在の書籍返品率は冊数で41.6%です。これはもう委託販売制の限界です。書籍雑誌は今、点数的にも部数的にも作り過ぎの傾向があります。パターン配本という

作られた本を機械的に送り出すという仕組みも問題があります。出版社、取次会社、書店の3社が協力して、もっと精緻な流通の仕組みを作っていくかなければならない時にきていると思います。

(近)再販制度、つまり返品も可、値引き販売はしないというこの制度が前提で今の流通3社(出版社・取次会社・書店)の分け前(利益)が設定されています。これを変えなければならぬと常に日頃考えています。特に利益の再配分を改めるのは何といても返品を減らすしか方法がないと思います。

### M マルエム春秋

本紙創刊時に当欄で連載した、高次脳機能障害でリハビリに励むMさんのその後をお知らせしたいと思う。

あれから7年の月日が流れた。早いものである。50キロそこそこだった体重も58キロまでに回復、患っていた糖尿病もHalc(ヘモグロビンエイワンシー)の数値も8から5.9までになるなど驚異的な回復ぶりである。当時Mさんと私たちが掲げた社会復帰目標計画、名付けて3B計画(Business・Bowling・Bookki)の三つのBは、目標に近づきつつあると聞いていいだろう。即ち、仕事に就く(Business)、趣味であったボウリングが出来る様になる(Bowling)、様々なことに関心をもつようになる(男性的な関心の高まりであるBookki)という言葉に象徴させた)というこの3つのことが出来る様になることを目指したわけである。何回かの連載で詳しくご報告したい。(次号につづく)

# 詩を書き続けて

登米市 菊田郁朗

詩集『風のうたがきこえる』を丸善さんから出版して、早や三年になる。生涯に一冊の詩集をだせば、という青春時代のかすかな夢を退職の記念に実現した。

中学校に在職中、生徒向けに毎週書いていた小詩をまとめたものである。ちょうどその年、退職を控えた平成十八年一月に冬季オリピックがトリノで開催され、荒川静香さんが不振の日本勢の中にあつて、唯一の金メダルをもたらし、日本中が驚きと歓喜の渦で沸きかえつた。荒川さんは私が利府町のしらかし台中学校に勤務していた時、生徒だったこともあり何回か会っていたので、陰ながらもずっと応援してきたのであるが、長野、ソルトレイクと低迷が続き、残念に思っていただけに、この快挙に長い間の胸のつかえが晴れ、涙が流れたものであ

る。彼女の精神力、集中力のすごさというほかはない。その時「トリノの空に」「ツーランドットの風」という詩を書き、その後、詩集の出版にあたり、荒川さんには序文を寄せていただいた。そんないきさつがあつての詩集の出版で、思い出深いものとなつた。

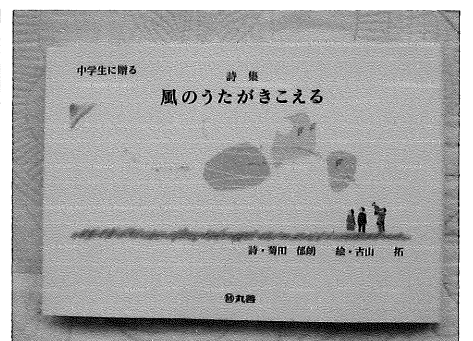
詩集を出版してから、以前のように継続して詩を書かなくなつたのだが、最近思い起こして、また書き始めている。それは私のような怠惰な人間はずぐ易きに流されて、毎日をだらだら過ごしてしまふからであり、それに、意識して書き続けないと、書けなくなつてしまふことにも気が付いたからである。井戸水も汲み上げなければ水が涸れるのと同じである。書くということとは習慣でもある。幸い一年前から仙台の一番町にあるカフエ「ザ・ラヴィングループ」に詩を置いてもらうことになり、月に五篇を

目標に書き始めたのである。一年で六十を越えスケットブックに添付している。十年間続けることを目標にしているが、いつまで続くかは疑問である・・・。

もう一つ続けていることがある。年三回春夏秋冬と行なわれる定禅寺ストリートアート展での出展である。これは定禅寺通りの中央の歩道を利用して行なわれる、様々なアート作品の展示と即売でたくさんの出店と見物客で賑わう大きなイベントである。もう五年位になるが、詩を展示する人はいない。何百人と通つていくのだが、立ち止まつて詩を読んでいく人も、ほとんどいない。ところが、中に何人かだが読んで、買ってくれる人もいて、そんな時は涙が流れるほど感激する。思わず手をとつて「ありがとう」と言いたくなる。そういうえば昔、学生だったころ、上京するといつ

も新宿駅の東通路で、太い柱を背に謄写版刷りの粗末な詩集を売っていた小柄なおばさんがいたのを思い出す。一冊三十円だったか五十円だったか。昭和四十年代の古い話ではある。(菊田記) 2009・11

菊田郁朗先生の『風のうたがきこえる』は、丸善仙台アエル店(☎022・264・0151)金港堂書店本店(022・225・6521)八文字屋書店(022・371・1988)紀伊国屋書店仙台店(022・308・9211)で好評発売中です。ご注文の際は「丸善仙台出版サービスセンター制作の自費出版本」とご用命下さい。



四六判ヨコ・273頁  
定価1500円(税込み)



画題「まな」

晩秋から初冬へと季節は流れていきます。今年、梅雨明けがなく、夏らしい夏を感じることもなかったように思います。そのせいでしょうか、自然の中にもつけない小さな異変を見ることが多くなりました。特別ではない、いつも通りの春夏秋冬を感じていたいと思つた日々です。そんな中にも、その時を忘れず様々な形、姿、色を見せてくれる生命を日々画帳に描きため木版画にしました。多くのおみな様に見ていただければ幸いです。

又お目にかかれればと思っております。

雪持月

筆子

阿部笙子木版画新作展 十一月十三日(金)〜十九日(木)

丸善仙台アエル店一階ギャラリー